

MINATO COLUMN 3

2021年9月発行

テーマ

～ コロナに負けず、頑張り過ぎずに、「みんなが笑顔になる場所」を ～

当院における認知症ケアの新たな取り組みについて

長崎みなとメディカルセンター 認知症サポートチーム
 チーム長 脳神経内科 主任診療部長 六倉 和生
 リハビリテーション部 係長 作業療法士 川野 志起
 認知症看護認定看護師 川原 隆

急性期病院における現状

認知症サポートチーム（Dementia Support Team:以下DSTと略す）は、2017年11月の設置以来、認知症の方にとってより良い医療と安心できる療養環境の提供を目標に活動を続けています。その活動を通して見えてきた課題に、認知症の方への身体拘束と病棟看護師の業務負担増加が挙げられました。

急性期病院の役割を遂行する中で、ADLを維持しながら、身体疾患を回復させて、患者さんが元の生活の場に速やかに戻れるようにすることが目標に挙げられます。その中で、認知症の方やせん妄を来たした患者さんのなかには、概日リズムの変調を来す方や記憶障害、見当識障害を伴い状況判断能力が低下し、医療安全が担保できない行動を起こす方がいます。見守りや寄り添いに多くの時間を割けない病棟スタッフは、医療安全と患者さんの尊厳とのジレンマの中で、患者さんのステーション内での見守りや他の患者さんの検温に同行してもらうことで患者さんの安全を確保したり、身体抑制を実施しなければならない現状があります。また、発動性の低下した認知症の方や低活動せん妄を来たした患者さんは寝かせきりの状態も少なくありません。

医療安全の
担保



患者さんの
尊厳

コロナ禍での新たな認知症ケア開始の試み

DSTでは2018年9月より身体抑制の時間短縮を目的に、認知症の家族の看取りや介護施設勤務の経験がある方をボランティアとして院内に招き、認知症の方への寄り添い活動、通称『よか余暇会』を設立し活動を続けてきました。その効果は、認知機能の刺激、身体拘束の一時的解除、患者さんの笑顔や看護師の業務負担軽減にも繋がりました。

しかし、新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、長期的に活動を中止せざるを得ない状況となっています。そこで、DSTが中心となって、感染に留意しながら効率よく見守りと認知刺激を行うことを目的として、2021年4月、新たな取り組み（本誌面では院内通称：「院内デイケア」と呼びます。）の試験運用を開始しました。



↑『よか余暇会』活動の様子（2019年撮影）

当院での院内デイケア 実施概要

院内デイケアの実施概要については、次のとおりです。

目的

- 1.患者さんの認知刺激、離床促進、日中の覚醒促し、精神賦活、抑制の一時的解除
- 2.看護師の業務負担軽減

活動日時

毎週木曜日 14時～16時

対象者

7階北病棟（脳神経内科・外科）、7階南病棟（整形外科・血液内科）入院中で、DSTが介入している患者さん（認知症自立度判定Ⅲa以上の認知症高齢者）で、下記の1～5の条件を満たす方。

- 1.デイケア参加により精神賦活や認知刺激、離床促進等の効果が望める。
- 2.自傷他害の行動がなく、精神症状が安定している。
- 3.身体疾患が回復状態にあり、症状が落ち着いており主治医の許可を得ている。
- 4.デイケアに参加できる身体耐久性がある。
- 5.家族からデイケア参加の承諾を得ている。

* 認知症高齢者の日常生活自立度Ⅱb以下でも必要性がある場合は対象とする。

参加人数

原則4～5名（感染症の配慮より）

活動場所

7階デイルーム

活動内容

折り紙や塗り絵などの創作活動、回想療法、コミュニケーションを中心とした認知刺激に加え、音楽鑑賞や映画鑑賞で精神賦活を行う。

対応スタッフ

認知症サポートチーム 作業療法士 2名
認知症サポートチーム 認知症看護認定看護師 1名



院内デイケアの試験運用にあたって

週に1回2時間程度のデイケアでは患者さんへの効果は乏しいのではないかと不安を持ちながらも『その時間だけでも患者さんに笑顔になってほしい』『病棟看護師の負担を軽減したい』との思いで院内デイケアの試験運用を始めました。

院内デイケアの試験運用にあたり私達スタッフの基本方針は“**スタッフが頑張り過ぎない事**”でした。最大の効果を得るためには、個々の患者さんの好みに合わせたアクティビティケアを計画・実施する事が理想ですが、通常業務と並行して実践するには相当な労力が必要です。そして、私たちスタッフが頑張り過ぎると「あれもこれも」と押しつけのアクティビティを行う可能性が考えられた事と、スタッフの業務負担が強くなりデイケアを継続できない不安がありました。そして、急性期の不安定な病態の中では、その場に集まり皆で会話したり一緒にTVを視聴するだけでも認知刺激になり、癒やしの場になると確信していました。

院内デイケアを実施した3ヶ月間の所感 ～患者さんの様子から～

3ヶ月のデイケア試験運用期間では、延べ60名の患者さんが参加されました。参加者の中には、病室で表情の変化の少ない方もデイケア中は常に笑顔が見られます。他の患者さんでは、30分程度の車椅子移乗で疲労感を訴える方が、2時間も離床出来たケースもありました。また、環境の変化に伴うBPSDや術後にせん妄を来した患者さんもデイケア中には、とても良い表情をされ穏やかに過ごされています。終了時には「もう終わりね」等の名残惜しさを口にされながら帰室する方もおられました。

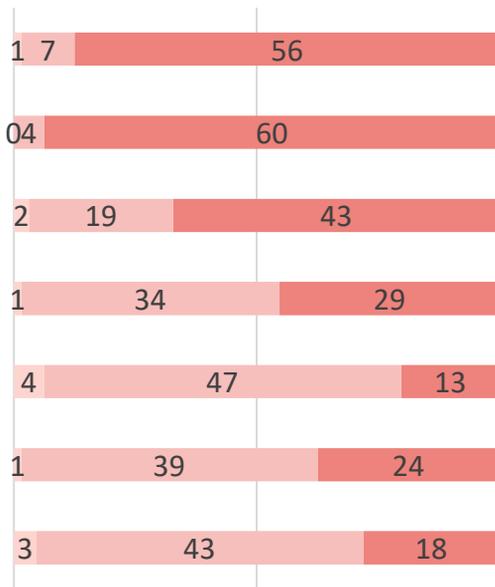


院内デイケアを実施した3ヶ月間の所感 ～スタッフの声から～

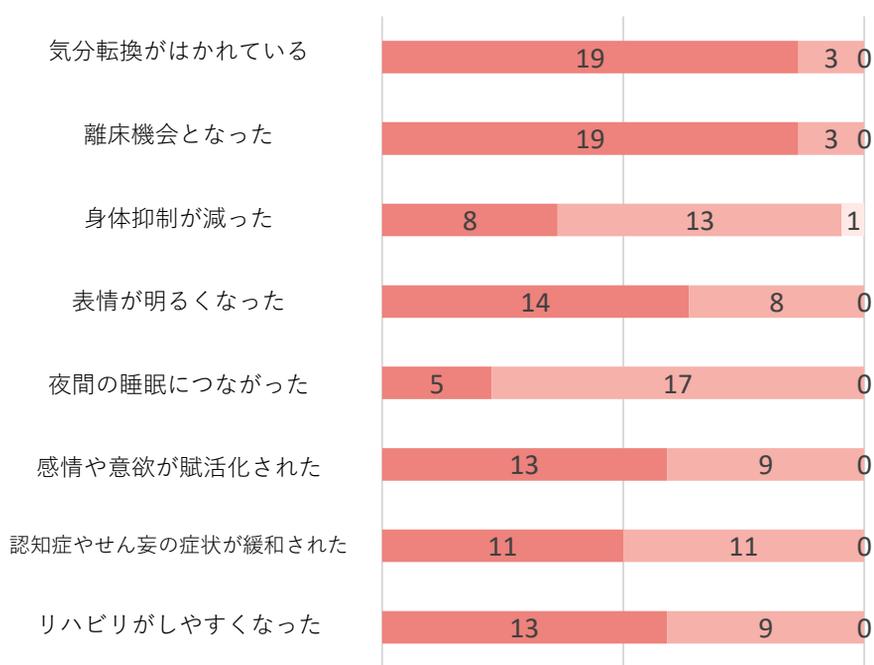
活動が1ヶ月を過ぎた時には、スタッフにも変化が見られ、医療安全センターからの応援があったり、セラピストが訓練途中に立ち寄ってくれるようになりました。今では対象病棟の作業療法士が毎週時間を確保して協力してくれています。対象病棟の作業療法士の参加によって、今ではアクティビティが充実してきています。

開始後3ヶ月時点で対象病棟看護師64名とセラピスト22名を対象に実施したアンケート調査では、「患者さんの離床機会となっている。」「もっと回数を増やしてほしい。」等の声が聞かれています。セラピストからの視点では「1対1の訓練では評価出来ない一面が観察出来る。」「楽しみながら離床が出来ている。」との評価の声があがっています。

看護師

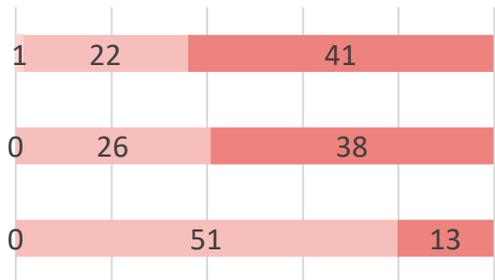


リハビリテーションセラピスト



■ そう思う ■ どちらとも言えない ■ そう思わない

看護師



リハビリテーションセラピスト



■ 軽減した ■ どちらとも言えない ■ 増大した

- ・ アンケート実施期間：2021/7/8～7/15
- ・ 対象者：86名（対象病棟看護師64名、リハビリテーションセラピスト22名）
- ・ 回答率：100%

看護師からの声

- ・離床が図れる良い機会なので継続してほしいです。
 - ・院内デイケアが始まって、認知症患者さんのセンサーコール対応がその時軽減されるためとても助かっています。ありがとうございます。
 - ・目が離せない、傍にいないと落ち着かない患者さんが多い中でデイケアをして頂いている間だけでも他の業務ができるため助かっています。
- ・病棟には色々な疾患の方がいるので場所を考えて欲しい。（笑い声が辛い人もいます）
- ・デイケアに参加している患者さんがすぐわかるように一覧等を病棟に置いて欲しい。
- ・日にちをもう少し増やして欲しい。



セラピストからの声

PTから ・開催頻度が多くなれば、よりせん妄の予防・改善に繋がるのではないかと
思います。是非、続けていただきたいです。

- ・患者さんの離床頻度が増えて助かっています。今後、効果判定も示す事が出来たら助かります。
- ・とにかく継続してもらえば幸いです

OTから ・頻度を増やすことで、もっと効果的になると思います。
・他病棟でも行ってほしいです。

STから ・面会制限もある現状からすると必要性は高いと思います。
・良い取り組みだと思えます。これからもよろしくお願いします。



アンケート結果をうけて・今後の活動拡大について

企画段階から懸念されていたことではありますが、現在の実施体制では、概日リズム形成やBPSD、せん妄症状の予防効果は乏しいことがアンケート結果にも表れています。その反面、デイケアを拡大する事で、せん妄症状やBPSDの予防・緩和の効果が望めることを担当スタッフも予測しています。

現在DSTでは、週1回のデイケア活動を週2回に拡大する事を計画しており、コロナ終息後には全病棟の患者を対象に毎日実施できたらと願っています。

デイケア拡大には人材や場所の確保など幾つかの課題があげられますが、患者さんが楽しむ様子や、せん妄症状の改善・スタッフの業務負担軽減に効果があることを示し、デイケア拡大に繋がりたいと思っています。

チーム紹介 認知症サポートチーム（DST）

当院DSTは、脳神経内科医1名、看護師1名、社会福祉士1名、薬剤師1名、作業療法士2名（2021年9月現在）の多職種でチームを構成しています。

認知症による行動や意思疎通が困難な入院患者さんに対して、身体疾患の治療を円滑に受けられるよう、また、できるだけ早期にもと居た場所（その人らしくいられる場所）に戻れるよう、専門知識を持ったチームスタッフが主治医及び病棟看護師と協力しながら療養環境の支援を行っています。

